

大好き！絵本

初瀬 恵美



『てぶくろ』 ウクライナ民話
絵: エウゲーニー・M・ラチョフ
訳: うちだ りさこ
出版社: 福音館書店

一年のうちで、最も寒いといわれる2月になりました。しかし、東京では春のような陽気になるほど、気温が上がったりする日もありました。驚いてしまいますね。

さて、あまり寒くはありませんが、今月は冬の絵本の定番『てぶくろ』の絵本を紹介したいと思います。この絵本は1965年の発売以来、根強い人気を誇る絵本です。

おじいさんが落とした手袋を、森の動物が見つめて住み始めます。まず最初に手袋を見つけたのはねずみ。ねずみはなんとはしごをかけて、お家らしくしました。その次にやってきたのがかえる。次にうさぎ、キツネなどなど、どんどんいろいろな動物がやってきて、住み始めます。そして手袋の家はテラスや窓がつくなどどんどんリフォームされたり拡張されていきます。

このどんどん変化する手袋を見るのも楽しい絵本ですが、もう一つ子どもたちが大好きなのが動物同士のやり取りです。例えば「だれ、てぶくろに すんでいるのは?」「くいしんぼうねずみ。あなたは?」「びんびんがえるよ。わたしもいれて」「どうぞ」というようなやりとりが、繰り返してできます。この繰り返しがとても楽しくリズムカルで心地よく、子どもたちは大好きです。

このように絵や掛け合いの言葉が魅力的な絵本ですが、つい先日違った視点の面白い発見がありました。それは、3歳児の男の子と絵本を読んでいた時のことです。その子は1ページ目の「おじいさんは あるいているうちに、てぶくろを かたほう おとして、そのまま いってしまいました。」というところで、「どうして、おとしたと?」「なんで落としたと?」と手袋をおじいさんが落としたことがとても気になりました。読み進めていても、また1ページ目にもどり「なんで?」とたずね、読み終わっても「なんで?」と尋ねてきました。最初は私自身あまり考えずに「どうしてだろうね。」と答えていましたが、とても熱心に「こうやって、落としたと?」と落とし方の再現をしてくれる中、「本当にどうしてだろうね。雪が降って寒いのにね。手袋落としたら、気づきそうだよね。」という話になっていきました。

わずか、1ページ目で、こんなにも豊かに想像を膨らませることができるなんて、すごいことだな、と思いました。手袋が一つ落ちている絵(右下の絵)と、話をきいただけで、頭の中ではおじいさんが登場し、歩き、手袋を落とす姿を何度も繰り返し想像しているのです。そして、絵本を読み終わった後、立っておじいさんの動きを再現していました。全く描かれていないおじいさんを想像し、動きを再現するってすごいと思いませんか?よく知っている絵本だったので、つい最初に紹介した絵や掛け合いの言葉に重点をおいていましたが、一人ひとり、絵本の世界観は違うということあらためて、教えてもらいました。そして絵本の世界って楽しいなと思わせてもらう出来事でした。

